

V 地域支援センター「サポートJOYO」目次

1 「サポートJOYO」について

- (1) はじめに
- (2) 地域支援センターの位置づけ
- (3) 相談・支援活動の実施状況
 - ア 年度別・月別相談件数
 - イ 平成22年度実施状況
 - (ア) 新規相談希望者と継続相談希望者の内訳
 - (イ) 主たる新規希望の内容
 - (ウ) 相談対象者内訳
 - (エ) 市町別相談件数
- (4) 本校に寄せられた相談・支援依頼の傾向

2 相談・支援の具体的事例

- (1) 相談支援
 - ア 巡回相談・来校相談の事例
 - (ア) 発達障害（小学校）「研修協力も含めての支援」
 - (イ) 高校生 アスペルガー症候群の診断のある生徒「研修協力も含めての支援」
 - (ウ) 不登校 本人・両親の相談支援
 - イ その他の相談支援
- (2) 研修支援
 - ア 研修会の開催
 - (ア) 「特別支援教育研修会」
 - (イ) 「事例支援研修会」
 - (ウ) 参加者の感想から
 - イ 講師派遣、研修協力
- (3) 他機関との連携
- (4) 情報発信

3 今後の方向性 ～広域な地域と連携した「サポートJOYO」～

- (1) 2年間の成果と課題
- (2) 今後の具体的な方向性

V 地域支援センター「サポートJOYO」

～城陽養護学校に求められる地域からの教育的ニーズに応じて～

本校の地域支援・連携のあり方とこれからの方向性

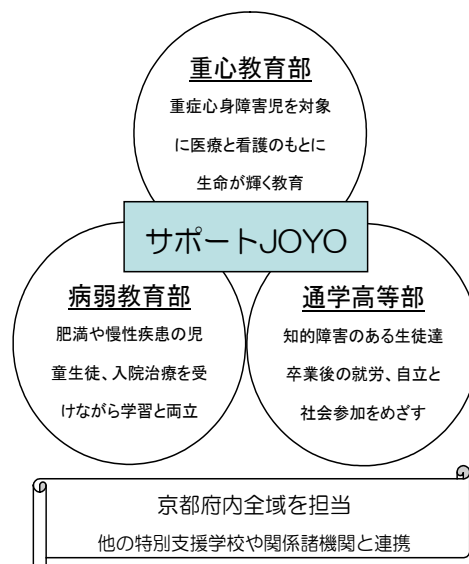
1 「サポートJOYO」

(1) はじめに

京都府立城陽養護学校 地域支援センター「サポートJOYO」は、3つの教育部からなる本校の教育の特徴や実践、隣接する国立病院機構南京都病院を始めとする医療機関との日常的なつながり、そして、山城地方を中心とした府内全域や他府県にも及ぶ広い地域との関わりを生かして、地域からの教育的ニーズに応じた支援や連携を行っている。

地域から寄せられた相談は、知的障害や発達障害のある子ども達の学習や進路に関わる相談、心身の病気や不登校・不適応に関わる相談など、約 130 ケース、450 件余り（平成 22 年 12 月現在）にのぼっている。地域における特別支援教育への関心の高さや、本校への期待の大きさとともに、地域支援センターとしての責任の重さを感じる場所である。

今後も、障害のある子ども達の自立と社会参加を目指し、本校の専門性を生かした地域支援の取組を進め、広域な支援のネットワークにも参画するなど、地域・学校・関係機関との連携を具体化していきたい。



(2) 地域支援センターの位置づけ・・・資料「サポートJOYO」組織図 参照

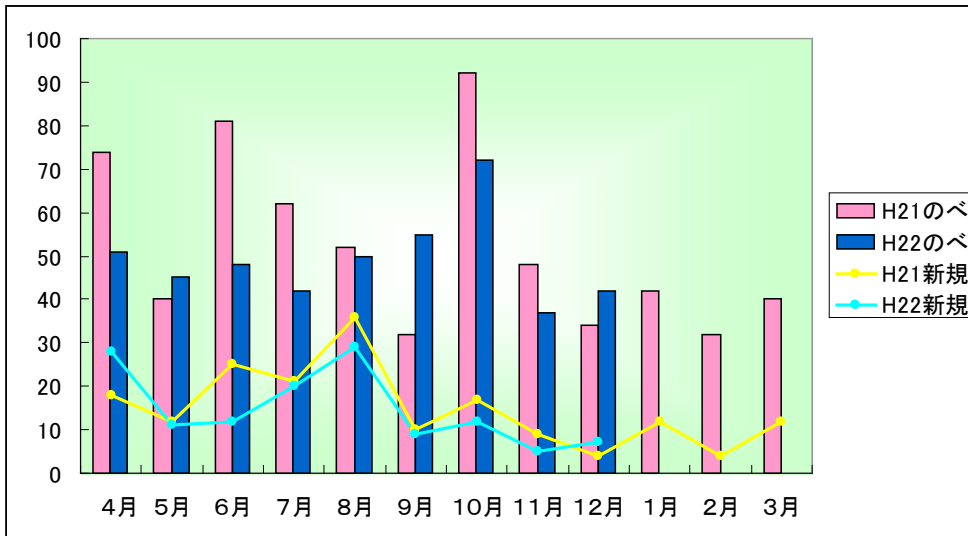
地域支援センター「サポートJOYO」は京都府の「地域等連携推進事業」による地域支援センターとして府内全域を担当している。センター長、専任の地域支援コーディネーター（2名）と、各教育部から特別支援教育コーディネーター（2名）で構成、小児科・精神科の学校医や臨床心理士、作業療法士、その他関係機関からの専門家を含め、巡回相談チームを組織している。校内では「地域支援校内連携会議」を組織し、全校の連携・協力による支援体制を図っている。

これら内外の協力の下、「特別支援連携推進会議」を設置し、本校に関わる地域支援・地域連携のあり方などの協議を進めている。

(3) 相談・支援の実施状況 2年間の活動実績集計から

ア 平成21年度、22年度の比較

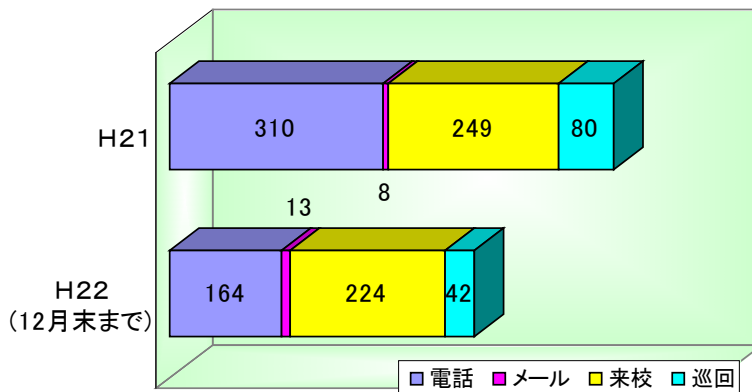
(ア) 年度別・月別相談件数



平成21年度の相談件数は629件、そのうち新規は176件、平成22年度12月末までの相談件数は、442件で、そのうち新規は、134件であった。

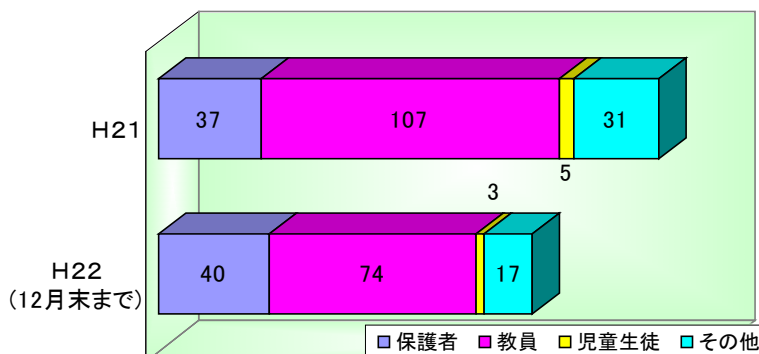
21年度は前年度と比べると、のべ件数は3倍近くにのぼっている。新規相談は4・6・8月に多く、継続相談は6・10月に多い。

(イ) 形態別相談件数



来校の割合が増えている。
22年度は来校しての継続相談が多くなった。

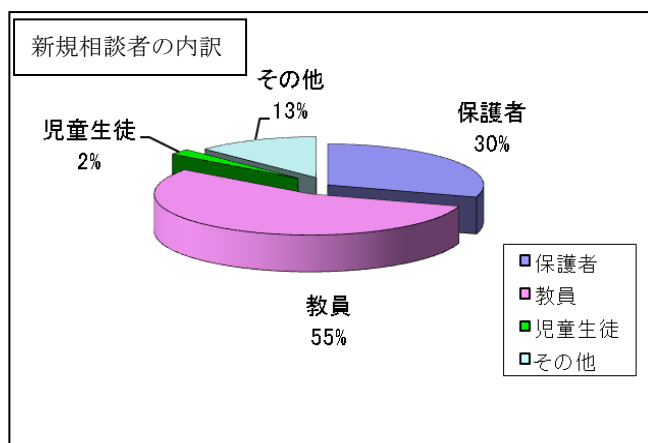
(ウ) 相談者の内訳



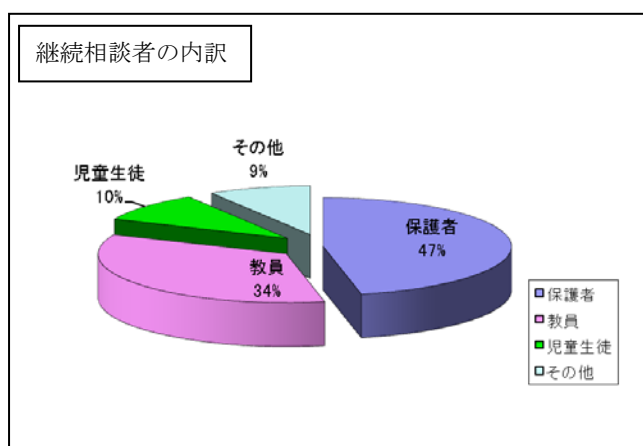
教員からの相談が多いが、保護者からの相談の割合が増えている

イ 平成 22 年度実施状況

(ア) 新規相談者と継続相談者の内訳



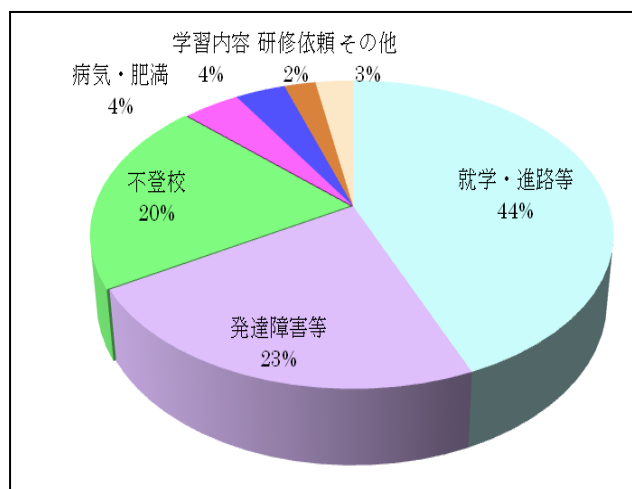
新規相談者の内訳は教員からが 55% で一番多く、次いで保護者からが 30% であり、児童生徒の 19% は進路相談、学校見学等である。その他の 13% は、指導主事、医師、適応指導教室指導員、スクールカウンセラー、障害者生活支援センター、地域福祉支援センター、児童相談所、養護施設等多岐にわたっている。



継続相談者も含めると、保護者が多く、継続して相談されるケースがある。

保護者からの不登校に関する相談では 1 ケース 20 数回にも及ぶケースがある。

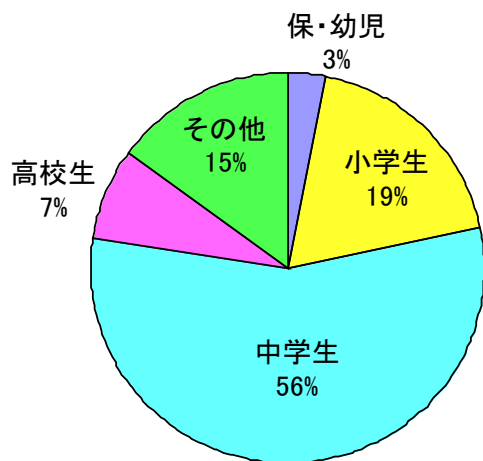
(イ) 主たる新規相談の内容の内訳



新規相談の内訳の主なものは就学・進学 44%、次いで発達障害等 23%、不登校 20% であった。不登校の割合が増加している。

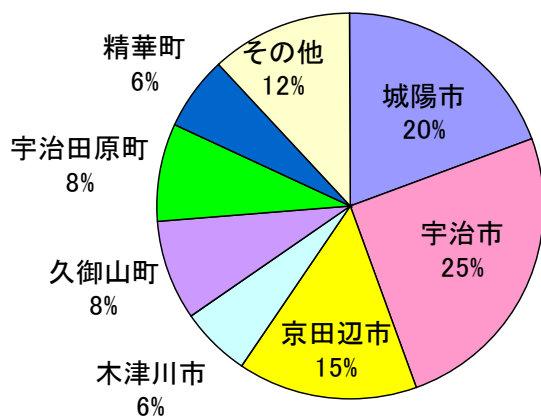
本校の専門性と地域の教育的ニーズとの一致が、昨年度より、さらに明確になっている。

(ウ) 相談対象者内訳



相談の対象となる子どもの内訳は、中学生56%、小学生19%となっている。高校生については、増加傾向にある。

(エ) 市町村別相談件数



市町村別相談では、宇治市25%、城陽市20%、京田辺市15%、近隣の市町村からと山城教育局管内からの相談が多数を占めている。その他の中には管外や京都市、他府県からの相談もあり、広い地域からの相談を受けている。

(4) 本校に寄せられた相談・支援依頼の傾向

これらの集計から本校に寄せられた相談の傾向をまとめると、知的障害・発達障害のある子どもの就学や進路に関わる相談、次いで不登校に関わる相談が多数を占めていることがわかる。

発達障害の子どもの学習や生活への支援に関わる相談も多く、中には集団生活の上で深刻な不適応行動を起こしている生徒の対応についての相談も数件見られた。

病院・医療との連携に関わる相談があること、来校相談が多いこと、中学生を対象とした相談が多数を占めること等も、本校の特徴である。

これらは、本校教育の専門性に対する、地域からのニーズと期待だと受けとめられる。

ほとんどが近隣の市町村からの相談であるが、府内はもちろん、中には他府県等からの相談もあり、広域な地域との連携の上に本センターの役割があることが確認できる。

2 相談・支援の具体的事例

(1) 相談支援

ア 巡回相談、来校相談等の事例

(ア) 発達障害（小学校）「研修協力も含めての支援」

対象児童	小学4年
主訴	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの中でのトラブル ・学習のルールが守れない ・漢字が覚えにくい、また順序立てて話せないし作文も苦手。
支援の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校のコーディネーターより依頼 ・母面談、及び校内委員会に地域支援コーディネーターが参加。 ・巡回相談員（作業療法士と）共に授業参観、本人の発達検査等のアセスメント ・校内委員会で支援について検討 ・校内の特別支援教育夏期研修で、本児についての事例研修会を実施。 ・個別の指導計画をたてる。
実態	<ul style="list-style-type: none"> ・興味のないことやわからないことは集中できず、うわの空。 ・運動は得意で、休み時間独自のルールをつくって、押し付けることはありトラブルになる。順番ぬかしをしたり突発的に危害を与えたりする。
巡回相談	<p><児童の様子></p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語の授業参観。注意集中が弱く、あくびがよく出る。口頭指示が入りにくく皆と一歩遅れて行動を始める。 ・隣の席の子に、ちょっかいをかける。 ・担任との信頼関係はできつつある様子。 <p><分析と支援の仮説></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルール <ul style="list-style-type: none"> →担任をキーパーソンにし、クラス集団作りが重要。頑張ったことをクラスの皆にフィードバックする。またルールの理解の仕方を教え、望ましい行動ができた時にはしっかりほめる。 モデルになる友達 ・集中のしにくさ <ul style="list-style-type: none"> →適度な覚醒を保つ。朝のストレッチ体操や丸つけのための合目的の離席。 注意喚起 ・自分の体のイメージ作り <ul style="list-style-type: none"> →順序のある遊び、友達と息を合わせて楽しむ活動。 ・気持の表出 <ul style="list-style-type: none"> →生き生きして活動している時に、コミュニケーションを取り、感情の代弁をし、自分の感情への気づきを引き出す。
今後について	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き学校に対して支援を行うこととし、学期末に支援に対する評価を行い巡回相談を継続予定。 ・個別の指導計画の評価と見直しについても助言していく。

(イ) 高校生 アスペルガー症候群の診断がある生徒「研修協力も含めての支援」

対象生徒	高校2年生（現在）
主訴	<p>高校1年生。対人トラブルが多く、学習にも支障をきたしている。整理整頓ができず提出物が出せない。トラブルを未然に防ぐ方法や発生した時の対処法を知りたい。</p> <p>本人・母：学校でのいじめがあると訴える。</p>
実態	<ul style="list-style-type: none"> ・学校より：周囲と些細なことでトラブルになったり、言動に過剰に反応して暴言を吐き騒ぐ。こつこつ努力ができず漢字や単語が覚えられない。このままいくと国語と英語が不認定になる可能性がある。授業に集中できず、板書が写せない。提出物が出せず言い訳をしてごまかす。大人に対しては「です、ます調」でしゃべることができ、落ち着くと素直に大人の言うことを受け入れられる。 ・母より：小中では友達はいたが、高校になり友達ができないしメールもしていない。本人が他の子に対して嫌なことを言っているのだと思うが、学校でいじめを受けている。そのことについて話をすると「どうせ俺なんか」とよく言う。興味のあることとないことの差が大きく、学習にも影響している。 ・生育歴として、言葉が遅く、変わったところがあったが個性だと思っていた。小4の時診断を受けた。
相談・支援の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・学校・母・本人のそれぞれと面談実施。 ・本人の実態把握のため、WISC-III、バウムテスト、エゴグラム実施。 ・検査結果から、本人の認知特性や心理状況を客観的に示す。 ・校内研修として、『発達障害の理解とA君への支援について』のテーマにて講演し、学校ができる具体的支援を提示。検査結果等から、母・本人にも認知の特性について伝え、医療機関へもつないだ。 ・本人の「スクールカウンセラーさんとは趣味や楽しい話がしたいので、『サポートJOYO』で支援を受けたい」という気持ちを尊重し、2、3週間に1度来校相談を継続している。学校生活の様子を聞く中で、感情認識トレーニングやアンガートレーニングを取り入れている。 ・高校（コーディネーター）と面談前後に連絡を取る。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・学校側が本人の特性について理解することで、対応方法を考慮できた。 ・医療につながったこと、学校では担任・SCとの面談、本校で本人の面談をすることで、彼の支援が進んだ。 ・リラックスできるためのツールを一緒に考え、活用できた。 ・トラブルはあるものの、授業中教室を飛び出すことはなくなり、以前より落ち着いて学習できている。

(ウ) 不登校 本人・両親の相談支援

対象生徒	中学3年（現在）
主訴	起立性調整障害（不登校に対する手だてと家族の関わりについて）
実態	<p>家族：祖父母、両親、妹（現在中1）</p> <p>中学1年体育大会後、風邪をひいて欠席し登校しにくくなる。クラブ内での1年生同士のケンカでどうしてもいかわからず泣いてしまい、自分は何も言えなかったという思いを強く持った。日常生活は普通に過ごす、学校の話になると落ち込む。朝になると制服に着替えられない。今自分に足りないものは「人間関係」と言う。</p> <p>真面目で優等生タイプ。5教科の成績は4か5。何かを選ぶ時は自分の気持ちより「こうあるべきだ」という理想の方を選択する。小さい時から大人しく周りに友達はあるが、自分からしゃべるといより、聞かれると答えるタイプ。学校や勉強に対する過剰適応し、家庭内の葛藤からくる母に対する分離不安がある。中学生になり変貌していく同級生に対する違和感が背景にあると思われた。心身症タイプの不登校である。</p>
支援の経過	<p>主治医の紹介で、保護者からの相談</p> <p>中学校、主治医と連携し母（父）、子来校相談。中1の3学期から現在まで相談を継続中</p>
支援の内容	<ul style="list-style-type: none"> ・自我の表出を促すことが必要と考え、二者選択やYes No表示を定着させる ・自分が負担に感じていることを自分で言えるようになる。常に優等生であり続ける必要はないこと、嫌なことの問題解決の仕方や心の持ち方について気持ちに寄り添ったり揺さぶったりしながら考えていく。できることを増やし自信をつける。 <p><家庭></p> <ul style="list-style-type: none"> ・執拗に登校刺激を続ける祖父母への対応→父から祖父母への働きかけをされ、不満はあるものの少し距離を置いて接して下さるようになる。 ・思春期の子どもの距離の取り方、母の心の安定を図る ・少しでも安らげる家庭へ <p><母へ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・母の育ちや思い、義父母への思いの受け止め。 ・不理解な家族への働きかけや接し方 ・母の本児への接し方や気持ちの持ち方 ・本児の状態や現状に対しての捉え方 →前回から来校までの生活の様子を聞く中で、母の本児への接し方を振り返り、ほめるようにした。 <p><本児へ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストレスマネジメント ・「家ではなかなか勉強しにくい」と来校した時に自主学習にも取り組ませた。 ・具体的な例をあげての対人コミュニケーションの練習。 <p><母子></p> <ul style="list-style-type: none"> ・仲立ちをする中で母に対して、思いが言えるようにした。母子一緒にリラクゼーションの取り組みも併せて実施。 <p><学校と></p> <ul style="list-style-type: none"> ・担任との関係は良好ということもあり、学校の配慮で3年間同じ担任。殆ど毎日担任から本人に電話連絡。月1回中学校のコーディネーターと連絡を取ることを基本にした。 ・進路については、中学校で対応。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・関係づくりを続けていく中で、生活リズムを整えること（就寝・起床・朝食）、家事を分担してやること、塾へ行き勉強と宿題を続けること等の、こちらからの要求を出せるようになり、少しずつできることが増えた。同世代の子どもと接することの必要性を考えフリースクールを紹介し、中3春から週1回通うようになった。 ・「塾での勉強の成果を試したい」という思いを持つようになり、英、数について定期テストを別室で受けることができるようになった。 ・5日制の単位制高校に進学を決め、現在月1回の高校への慣らし登校を開始した。
今後に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・進学先高校へのサポートJOYOとしての引き継ぎ

イ その他の相談支援（中学校別室担当教師からの相談・適応指導教室からの継続巡回依頼等）

不登校傾向のケースについては、保護者から、中学校の教育相談担当教師や、適応指導教室からの相談依頼もいくつかあった。巡回相談を実施して、教室での本人の様子の観察や発達検査の実施、保護者との面談、さらに「サポートJOYO」巡回相談員である医師や作業療法士の協力を得て、本人のアセスメントや具体的な支援の手だての検討を重ねた。

進路・就労にむけての相談としては、通学高等部・病弱教育部を中心に、来校相談を数多く実施した。本校への入学・転入に関わる相談だけではなく、発達障害や不登校、学習の遅れ、様々な心理的課題等をかかえた子ども達（小学生から中学生、高校生等）の進路に関わる相談がほとんどであり、進路選択の難しさとともに、本校の地域支援の機能の充実がますます必要であると感じている。

その他、家庭生活への支援が必要なケースで、地域の生活支援センターや児童相談所と連携したものもある。

(2) 研修支援

ア 研修会の開催

(ア) 「特別支援教育研修会」

地域支援の視点から「特別支援教育研修会」を年一回企画・実施した。教育関係機関やその他関連諸機関（医療、福祉、保健、労働、行政）の関係者を対象とし、より多くの参加者を受け入れられるよう「文化パーク城陽」を会場とした。

平成21年度特別支援教育研修会

テーマ：「子どもがかわる・先生がかわる・親がかわる 教育で使える支援」
～応用行動分析的アプローチの活用～

日時：平成21年7月31日（金） 13:30～16:45

地域の教育関係者を中心に、医療現場や保健所、地域の障害者支援センターなどの関係機関から約350名の参加者があり、地域における特別支援教育への関心の高さや、取組の広がりや認識するとともに幼児期から社会的自立まで、長いスパンに立った支援の継続の必要性を感じる研修会となった。兵庫教育大学大学院教授井澤信三氏の基調講演をもとに、本校校医有賀やよい氏をコーディネーターとして、パネルディスカッションを行った。パネラーとして、京都府総合教育センター今田三保氏、障害児（者）地域療育支援センター「ういる」コーディネーター河野照正氏など、各方面からコメンテーターを迎えたことで、幅広い内容のディスカッションを行えた。それぞれの専門性や実践に関わる話や、それらに関する会場の参加者からの発言も交えながら研修を深めることができた。

平成22年度特別支援教育研修会

テーマ：「自己評価を高め二次障害を防ぐ教育支援について」

日時：平成22年7月23日（金） 13:00～16:30

二次障害を防ぐ教育支援をテーマに、約270名の参加者を迎えての研修会となった。前半は、関西国際大学教育学部准教授中尾繁樹氏に、小学校高学年からおこりうる自己肯定感・学力の低下や二次障害を防ぐ教育支援について講演をいただき、後半は、本校校医有賀やよい氏をコーディネーターとして、パネラーには、京都府総合教育センター特別支援教育部 研究主事兼指導主事大森直也氏、障害児（者）地域療育支援センターういるコーディネーター河野照正氏を迎え、「気になる子どもたち」に対しての支援についてディスカッションを行った。事前アンケートでの質問を基に、いろいろな立場からの話があり、日々の子どもの具体的な捉え方、またその支援について研修を深めることができた。



【今後に向けて】

毎年多くの参加者があること、また事前に具体的な質問が寄せられることなどから、本校の研修会に対する地域からの期待の高さを再確認するものとなった。期待に応えるためにも、今後も地域のニーズに応じたテーマを設定して企画する。構成としては、講演とパネルディスカッションというスタイルを継承し、質問や要望を積極的に取り入れ、より地域の実態に応じた研修会となるように発展させていく。

(イ) 「事例支援研修会」

平成21年度事例支援研修会

テーマ : 「不登校の子どもや保護者によりそった支援」

日時 : 平成21年11月12日(金) 15:40~17:15

講師に、本校地域支援センター「サポート JOYO」巡回相談員として協力いただいている臨床心理士 今野芳子氏を迎え、「事例支援研修会」を開催した。平日の放課後の開催であったが、地域の小中学校、高等学校、適応指導教室等から多数の参加があった。

久御山町適応指導教室の実践発表をもとに、日々不登校傾向にある児童生徒の指導・支援にあたっておられる先生方と、それぞれの実践や課題等を交流し合い、「子どもや保護者によりそった支援のあり方」を深めることができた。

最後に、講師の今野芳子氏からご指導ご助言をいただき、「子どもや親を孤立させない連携のあり方」や、「指導者がまず聞くことの大切さ。その上での“節度ある介入”の必要」等、支援の新しい視点を発見することができた。



平成22年度事例支援研修会

テーマ : 「不登校の子どもや保護者によりそった支援」

日時 : 平成22年11月11日(木) 15:40~17:00

講師に、京都府教育委員会スクールカウンセラー、長岡京市地域包括支援センタースーパーバイザー兼カウンセラーとして勤務されている臨床心理士 森和子氏を迎え、事例支援研修会を行った。今年度も地域の小中学校、高等学校、教育委員会、適応指導教室、就労・生活支援センターからの参加があった。

本校より実践研究事例を発表し、その後不登校生徒の支援に関わって、中学校と進学先高校との連携方法や、養護教諭と担任の関わり方等について、それぞれの実践や課題を交流しながら深めることができた。

最後に、講師の森和子氏からご指導ご助言をいただき、「なぜ学校に行けないのだろう、ではなく、なぜ学校に行けるのかという逆の発想で考え、登校ができる条件のなかで、今一番支援できることから支援していく」という、不登校生徒の支援について、新たな視点からご指導・ご助言いただいた。



(ウ) 参加者の感想から

- ・中尾先生の話は、実践例が多く、子どもの見方・支援についてとても具体的に教えていただき参考になった。
- ・発達障害を抱えながら困っている目の前の子どもたちに対して、教師として基本的にどのような姿勢でいるべきか、ということを変えて知り、意欲がわいた。
- ・学級経営の仕方にまで話をしていただけだったので、とても参考になった。
- ・パネルディスカッションでは、普段あまり聞くことできない多方面の方の専門的アドバイス、生の声やいろいろなパターンのお話を聞くことができ、大変勉強になった。
- ・適切なパネラーのアドバイスと有賀 Dr.の説明、とてもよくわかった。

【平成22年度特別支援研修会】

- ・「なぜ登校できているのだろうか？」等、森先生から大切なことを教えていただいた。
- ・場面緘黙については、年々増えてきているように感じている。どのように指導するのがいいのか、参考になった。話さないことを認め、今後は他のできることを見つけ伸ばしていきたい。
- ・具体的な事例でわかりやすかった。また細かな分析から、指導されていると思った。
- ・質問内容に丁寧に答えていただき、とても参考になった。日々手さぐりで実践していることに、ズバリ答えていただいた。また、明日から少しずつ寄り添い、前に進めるように頑張りたい。

【平成22年度事例支援研修会】

本校地域支援センター「サポートJOYO」では、今後も地域からのご意見やご要望にそって、このような事例を基に、より身近なテーマでの研修会を開催したいと考えている。

イ 講師派遣、研修協力

「サポートJOYO」では、地域からの要請に基づいて、特別支援教育に関する校内研修を支援するために、講師派遣などの研修協力を行っている。

今年度は、地域の小・中学校に加えて、新たに地域の学童保育の指導員研修の要請があり、社会教育の場における研修のニーズにこたえることができた。

	講師派遣・研修協力主な内容
教育委員会主催の研修会	・発達障害やその周辺児の理解と対応について ・特別支援教育の進路について 等
小中高校の校内研修会	・WISCⅢの概要と特別支援教育に関わる支援について ・PDD傾向の生徒の支援に関わって ・発達障害について～生徒の支援に関わって～ 等
教育研究会	・通常学級に在籍する特別支援を必要とする児童への有効な手立てについて 等



研修事例（障害を抱えた子どもたちへの対応について）

対象	学童保育所指導員
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・自閉性障害の障害特性について、具体的な子どもの姿から報告する。 ・社会性を身に着けさせるための指導において、大人が陥りやすい過ちについて報告する。 ・応用行動分析の手法の基礎学習。 ・指導員さんから報告された子どもの困った行動について、ABAを使って具体的に分析し、指導の手立てについてアドバイスする。
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な子どもの姿を通して、日頃、なかなか連携がしにくい学童保育の指導員さんと連携をすすめることができた。 ・それまでに教育相談として、保護者や小学校の教師と相談してきた事例の放課後の様子を知ることができ、家庭と学校、社会教育の場の三者が連携していく機会になった。 ・今後さらに三者が連携し、一日を通した子どもへの支援がすすむよう地域のニーズの掘り起こしが課題である。

（３）他機関との連携

地域への相談・支援活動において、隣接する南京都病院や院内療育指導室との日常的な連携はもとより、児童相談所や家庭児童相談室、種々の障害者生活支援センターや障害者就業・生活支援センター、労働機関等との連携協力を得ている。さらには、医師や臨床心理士、作業療法士等の参画の上で、本校主催の「特別支援連携推進会議」を開催し、本センターの巡回相談チームとしても、巡回相談や研修支援に協力を得ている。

同時に、近隣の教育局や市町村教育委員会の理解協力を得て、支援・相談活動を進めており、一部では教育委員会主催のコーディネーター会議への出席や研修会への講師派遣、合同の巡回相談等を実施している。また、以前から近隣市町の特別支援教育研究会に行事の取組を中心に参加し、その中で、地域の学校関係者や障害のある子どもを持つ保護者等とも交流を持ち、本校への理解も広げてきた。今後も積極的に研究や研修への協力を進め、連携を継続していきたい。

近年、教育機関だけでなく、福祉や保健、労働などの関係機関が連携して、地域の中で障害児（者）の支援にかかわる広域な支援ネットワークが構築されようとしている。

本校も地域のセンター的役割を担う立場を踏まえ、地域支援の取組や日々の教育活動の基、関係機関や協議会等との連携を継続しながら、本校の役割を明確にして、障害児（者）の生涯にわたる支援の広域なネットワークの構築を推進していきたい。

(4) 情報発信

ア ホームページ

「サポート JOYO」の活動をより広く知ってもらうために、インターネットのホームページで情報を発信している。

ホームページでは、地域支援の概要や相談方法、活動の実績紹介など様々な情報にアクセスできるようになっている。

なお、「サポート JOYO」のホームページは、本校ホームページのトップよりリンクされている。



京都府立城陽養護学校
<http://www.kyoto-be.ne.jp/jyouyou-s/>

イ 「サポート JOYO だより」、パンフレット

「サポート JOYO」は、「サポート JOYO だより」やパンフレットでも知らせている。これらの資料は、担当者が関係先に配布すると共に、ホームページからもダウンロードできるようにしている。



サポート JOYO だより



パンフレット

3 今後の方向性 ～広域な地域と連携した「サポートJOYO」へ～

(1) 成果と課題

<成果>

- ・本センターへのニーズの高まりに応じて、数多くの支援・相談活動を実施することができた。
- ・地域の様々な学校や関係機関との連携・協力を具体的に深め、広げることができた。
- ・地域支援や教育相談にむけての専門性の向上にむけて積極的に研修を進めることができた。

<課題>

- ・本センターについての情報発信・提供を具体化する。
- ・各種関係機関・支援ネットワーク等との継続的な連携を構築する。
- ・支援・相談の実施状況や内容に対する教職員の共通理解と、人材の育成を積極的に図る。

(2) 今後の具体的な方向性 「サポートJOYO」のさらなる充実を目指して!

①専門性を生かした相談支援の充実

- ・医療との連携の継続と充実 ・病気や肥満、不登校に関わる相談支援
- ・進路・就労についての相談支援（知的障害や発達障害等）
- ・発達障害、不登校に関する研修支援の継続

②専門性を生かし、ニーズに応える教育相談の実施

- ・巡回相談チームや校内外の人材を活用し、具体的な支援や手立てにむけての継続的な相談

③研修支援と情報発信

- ・発達障害・不登校に関する教員への研修支援